

## ドナウ通信

## メセナとサラリーマン社会

盛田 常夫

ひとつの歴史社会が、その時代の文化をどのように抱擁できるかによって、文化の衰りが違ってきます。今我々がブダペストで親しんでいるクラシック音楽やオペラ等の多くは、18-19世紀の貴族文化によって育まれたものです。貴族がスポンサーになり音楽家の面倒をみることで、ハイドンが、モーツアルトが、ベートーベンが育ちました。日本でも貴族の文化を武士が習い、商人がスポンサーになって伝統文化を保持しました。

はたして、現代の社会では誰が文化のスポンサーになるのでしょうか。

旧社会主義国家では国をあげて、一流の音楽家、スポーツ選手を育てました。モスクワのポリショイ劇場はその頂点に立つものです。ここでは国家がスポンサーだった訳です。

他方、西側諸国では商業主義の文化が主流です。興行的にペイするものが栄える仕組みになっています。ここでは国家ではなく企業がスポンサーですが、企業PRにならないものは支援の対象になりません。

近年、直接に企業の利益に結びつかなくても、企業イメ

ージを高める目的で、文化活動に一定の資金を定期的に支出するシステムをとる日本企業が数多く現れました。パプルの恩恵でもあったのででしょうか、企業のメセナが、一つの流行になりました。しかし、まだ付け焼き刃的な感を免れません。現代企業の使命としてのメセナではなく、他の会社もやっているからお付き合い、というのが本音でしょう。それも社長が音頭をとらなければ、文化にお金は動かせないというサラリーマン社会の限界があるように思われます。

ハンガリーでは89年以後、国立オーケストラに対抗してブダペストフィルが生まれました。この5月、ハンガリー・シエルはブダペストフィルに対し、毎年、1千万フォリントの支援をおこなうことを決定しました。オーケストラの年間予算は2億フォリント程度ですが、それでも1千万フォリントは大きな支援になります。

わが小林率いる国立オケにたいして、我々日本人社会は何ができるのでしょうか。[KOBAYASHI]のおかげで、当地の日本人、企業が無形の利益を享受してきたことは疑いありません。[KOBAYASHI]の存在によって、日本の社会と文化が評価されるという外部経済効果、いや外部文化効果を受けてきたのです。国際的活動を展開している数少ない日本人常任指揮者を、「大國」の日本人が支援しないで、誰が支援するのでしょうか。

# 大使館からのお知らせ

## ・在留届

在留届は、外国に3か月以上滞在しようとする方が、旅券法および同法施行規則によって大使館に外国滞在の届出を行うことになっていますが、未だ届出のない方もいるようです。

緊急の場合には、大使館からの連絡や保護を受ける重要な資料になりますので、未届出の方は大使館にご連絡ください。

また、住所の変更等があった場合も同じくご連絡ください。

ハンガリーでお困りの方はおられますか？

Dr. Tamás Radnaiさん

Radnaiさんは、東京工業大学

に助手として2年間(1987~19

87)留学し、最近では、1年ほど前

に国立岡崎研究所で、薬学の研究のため1年間(1991~1992)滞在されていました。Radnaiさんには、2人のお子さんがいらっしゃいます。2人に滞在中は、日本の小学校に通っていたとのことでお父さんにも増して日本語が堪能です。

また滞在中には、日本での生活面でももちろんのこと家探しや日本での習慣について日本の方に大変お世話になったとのこととその恩返しではないのですが、もし、当地にてお困りのことがありましたか何でも日本人の相談のりしたいとのことでした。

現在、ハ・日友好協会の会員でもあり、何かお困りのことがありましたら相談されてはいかがですか。

連絡先 135-1540

250-0676 (自宅)

(大使館領事部)

ハンガリーにも仏像があるのを知っていますか？

意外と知られていませんが、ハンガリーには明治時代に伝来した日本の仏像などの美術品が次のところに所蔵されています。

1. Rath György Museum

(Budapest, VI., Gorkij Fasor 12)

入口を上がった1階各室に日本、中国、インドの美術品が常設されています。

日本の美術品では、江戸時代に制作されたとみられる小型の各種仏像や200個近くにも及ぶ、ねつけ。(象牙に装飾を施したもの)が特に目を引きます

2. Museum of Applied Arts

(Budapest, IX., 0101 út 33-37)

こちらは常設ではありませんが、倉庫に、日本の仏像等が所蔵されています。

ハンガリー国立オーケストラ

支援のお礼

ブダペスト商工会

幹事 三菱商事㈱

村岡 慶之輔

小林研一郎先生は1974年第一回

ブダペスト指揮者コンクールで優勝さ

れ、以来ハンガリー国立オーケストラ

を指揮して来られ、1987年には常

任指揮者に就任、1991年初代マー

ラー以来史上3人目という音楽総監督

の称号を贈られ、ハンガリーの音楽レ

ベル向上に貢献されるばかりでなく、

日本・ハンガリーの友好と親善の為、

多大の貢献をされていること御高承の

通りです。

然し乍ら、民主化と市場経済への改

革の中、国家財政は逼迫し、これに伴

って国立オーケストラも苦しい経営を

強いられています。この窮状を救う為

各方面から支援の手が差し伸べられて

いますが、今般当商工会からも有志各

社により支援金が寄せられることとな  
りました。オーケストラ経営の一助と  
なり、日本・ハンガリーの絆が益々強  
くなるよう念願すると共に、この場を  
借りて協力頂いた各社に厚く御礼申し  
あげます。



# 人物往来



(敬省略)

5月

△大使館関係▽

着任

梅村 裕子

△商工会関係▽

離任

草薙 秀碩

秋山 卓男

着任

丸山 和正

木村 孝

伊藤忠商事

長期信用銀行

伊藤忠商事

長期信用銀行

# 特集

## 私のハンガリー

「住めば都」

江浦 千恵子

ブダペストに住み始めて2年が過ぎました。始めの頃は、見るもの聞くものすべてが珍しく、興味深く、多少の不便さを忘れさせるほどでした。物珍しさを感ぜなくなる頃になると、当地での生活や、当地そのものへの不満が生じるものと思っていました。2年

が過ぎた今では、逆に、買物物の不便さや非能率的でイライラさせられた所にもすっかり慣れ、ますますこの国での生活が、居心地の良いものになっています。2年前に美しいと思った所は今も変わらず、目にする度に美しいと思わずにはいられませんし、1年のうちで一番素晴らしい季節の今日この頃

は、何の変哲もない我家の外の景色をながめるだけでも、この国で暮らすことができて良かったと思わずにはいられません。数年間、滞在するだけの私です。表面的な部分にしか触れられずに帰国することになるかもしれないが、帰国後もこの国への興味は、尽きることがないと思っています。

「出会いと出産」

小林 明子

早いもので、ブダペストで暮らし始めてから、2年半が過ぎました。

着いたばかりの頃は、まだ物資も乏しく、冬だったこともあって、街中も道行く人々の表情もずいぶん暗く感じられました。私自身も多くを求めすぎ

ていたせいか、溜息ばかりついていたような気がします。

そんな中で、日本人の方々との交流は、私にとってとても支えになりました。またそれは今も変わりなく感謝すべきことだと思えます。それと同時に毎日の暮らしの中で、たくさんのハンガリー人の親切に出会い、そのおかげで、ここでの生活が、楽しく充実したものになっていきました。特にここで出産したという事が私にその印象を強くさせました。

自分自身もずいぶん強くなった気がします。妊娠中もここで出産することを祝福され、生まれてきた赤ん坊をまるで宝物のように扱ってくれるのを感じて、幸せな気持ちになりました。

今でもよく思い出されるのは、分娩の際、私がいまだにハンガリー語を話せないせいか、殆ど無言のうちに処理がなされていき、ひどい痛みと不安に陥っていた私の手を、その病室を掃除していた女性が黙って握っていてくれたこととです。

この様に、私にとってのハンガリー生活は不便なことも多いながら、人々の情にあふれる温さを肌身に感じるもので私の心も優しくしてくれるものです。

### 「ゆとりを考える」

森本 多美

わが家の長男は、現在こちらの幼稚園（オヴォダ）にお世話になってます。この一年半で、日本との違いを最も感じているのが、父親が送り迎えをしている姿をよく見かける事です。先生方と話をしていることもあり、公園などへ行っても、夕方や休日だいたい父親が子供を遊ばせていて、その遊ばせ方が上手なのです。

もちろん、共働きの家庭が多いため

でしょうが、強制されたのではなく自然に、楽しみながらという感じですよ。

これは、子供の日常生活、つまり子供自身をよく知るためにとても良い事ではないでしょうか？

時間の「ゆとり」とでも言うのでしうか。たとえば、子供が自分で靴を履こうとしている時、ハンガリー人の母親は「ラッシュャン、ラッシュャン（ゆっくり、ゆっくり）」と言うそうです。気をつけてはいるのですが、なかなか難しい言葉ですね。

ハンガリーは数十年前の日本のようだとされています。物質的な面はともかく、精神的な面ではこのように時間の余裕のある方が人間らしくて私は好きです。

しかし、「ゆとりがある」は「ルーズ」ではありません。配達や修理を頼んで待ちぼうけを食わされた経験をお持ちの方も多いでしょう。これだけは是正してほしいと思います。

### 「トラムの中で」

竹内 麻智子

ハンガリーでの生活も気がつくとい年が過ぎ、6か月だった娘も今では公園でハンガリーの子供達にまじって遊んでいます。

私は車を運転しませんので、普段の買い物や外出はバスやトラムが中心になります。先日とてもこみあっているトラムの入り口付近で娘を抱っこして立っていました。すると後から乗って来たおばあさんが、着席している人に向かつて、「小さな子供を抱っこしているお母さんに誰か席を譲ってあげて！」と呼び掛けてくれました。直ぐに近くの席の男の人に席を替わってもらえたのです。何度も席を替わってもらえたことは今までもあったのですが、立っている人がわざわざ呼びかけてくれたことは始めてのことでした。立ってくれた人もそうですが、声をかけたおばあさんに感謝の気持ちでいっぱいでした。この他にも、街を歩いていて見知らぬ人が、階段でベビーカー

を優しく持ち上げてくれたこともあります。子供を抱き上げられたり、体じゅうにキスしてもらったことも数えあげればきりがありません。

ハンガリーは日々、生活しやすくなっているとはいえ、ついつい日本での便利な生活と比べてしまう私ですが、このような他人に対する思いやりの心を、日本では忘れがちだと思います。日本に帰った時に、私がハンガリーの人にしてもらったことと同じことができれば、と考える今日この頃です。

『1992年9月12日

BUDAPEST着』

古屋 厚子

フェリヘジ空港には、真っ黒に日焼けした主人がショートパンツから少々覆せた足をして、VIP室に座っていた。このむっとした熱気、窓の外はカンカン照り、アフリカかどこか南国の飛行場かしらと一瞬思ってしまった。

車のマークがとれた、フロントガラスにガムテープがビツと貼られた、それ

でもベンツに乗り、右側通行でブダペストの街へ。ハンガリーへの第一歩を踏み出す。

大きな円筒の屋根や、古めかしい建物が並ぶ大通りを走る。ここがブダペスト。何年かは住むであろう場所なんだ。ここは日本でもTOWNでもないHUNのVILLと、自分に言い聞かせつつ、町を眺め灰色と枯れ草色になつてゐる樹木の町はどんな所なんだろう。いずれにしても私を迎えに来てくれた、少々細くなった主人を早く元に戻さないと、と一応、優しい妻は思うのでした。

と、まあこんな文章を珍しくノートに書いてゐるのを見つけた。あれから8か月以上経ち、ノートに何かいて、なんていう日々は皆無に等しい位、忙しい(している)私です。

お陰様で今ではここでの生活の仕方に馴れつつあります。しかしとみに日本語の乱れが酷しくなってきた頃にハンガリーに来たので、ハンガリー語には夫共々、苦勞する毎日です。

続めない通りの名前、食品名。

えーと？ホジャ、ホジャ、ホジャ？  
ケセネム、ネムネム、ニンチ、チョコロム。

エッジ、ケットー、ハーロンしか覚えられない夫よりは遥かにvocabularyは増えつつあります。

今日、新緑の季節、我家のマンションから見る景色は素晴らしく、どの部屋の窓から見てもそれぞれ美しく、特に夜、Lipiceを走る車のライトの流れ、遠い町の灯、キラキラと光る様は最高に贅沢な気分させてくれます。

何処の国に居ても健康で好奇心に満ちていれば楽しく暮らせるでしょう。ブダペスト駐在になったこのchanceに感謝して今日も元気に1日を過ごしたいと願う私です。

『2度目の春を迎えて』

鈴木 典子

生活者としてこの国で暮らして約1年半。毎日が冒険、毎日が驚きの日々も、同じ季節を2度目に迎える頃から

通り一辺の観光旅行では経験できないハンガリーが少しずつ見えてきて、より一層味わい深いものになりつつあります。

家族と共に過ごす時間を、とても大切にするところなど、聞いていた以上だし、老夫婦がお互いをかばい合いながら散歩をしている姿を見るにつけ、ある意味では、何と豊かな老後だろうと思ってしまう。

バスや路面電車で、老人やベビーカーを押した女性が乗降する際、必ずまわりの人達が手を貸す、その素早さとさりげなさにはいつも感心させられます。老人がバスに乗ってくるのを見つけると、サッと席を立て、まるでそこが前から空席だったように見せてしまうテクニクは素晴らしい、私も真似して見ようと思うのですが、タイミングが難しく、「譲ってやった」みたいになってしまいます。

ハンガリーに来たばかりの頃、無愛想な店員の態度に少々傷ついたり、各

家の敷地の前に立ちはだかる、錠前つきの柵に疎外感を抱き、冬の寒さの厳しいのには辟易したけれど、今ではそんな所にも慣れてきて、ヨーロッパの人々が「復活祭」を迎える喜びがどんなものであるかが知識としてでなく、体で感じられるようになってくると、また次の年も、春から初夏にかけての輝くような季節を、この国で迎えてみたいと思うようになってくるのです。

### 「ブダベスト生活3年目の印象」

宮地 範子

2才の長男と半年の長女と共に、始めたの海外生活への不安を一杯に抱えてブダベストに来た日から早いもので3年がたちました。

当時の第一印象としては、良い面としては『それは美しい夜景』、『緑豊かな町並み』、そして『街にゴミが少ない』等で、少しホッとした一方、サービス天国の日本しか知らなかったこともあって、『電話回線がつながらな

い』、『水道や・電気工事屋など信じられないほど仕事がおそい』、『医療サービスの質が悪い』等、なにかにつけて生活全般の非効率に腹が立ったのが思い出されます。そんななかで時折ウィーンに気分転換をかねて出掛け、車のトランク一杯のお菓子や魚を買いにいくたびに、ウィーンの街がキラキラと輝くように思えたものです。

その後、西側の資本が次々とハンガリーに進出して、ご存じマクドナルド・フライドチキン・ユリウスやセナラの焼き肉等ができたり、冬でも様々な輸入野菜が手にはいるようになったこともあって、生活をあずかる主婦としてはずいぶん便利になってきたと思えます。

しかし何と言っても、私にとってブダベストの印象がアップした第一の原因は『オペラ』です。日本にいたときにはオペラなど見向きもなかったのに、ある日友人にすすめられて観に行った『魔笛』にはじまり、『タンホイ

ザー」でワグナーのファンになり、その後は1年間に50本を越える作品を見てほとんどオペラ中毒者になってしまいました。素晴らしい劇場に少しお洒落をして出掛け少数の限られた観客の為に肉声で一生懸命オペラを見せてもらえて、しかも値段は日本の何十分の一という安さというのは、何と贅沢なことでしょう。

不思議なもので、オペラの楽しみを覚えてからは、それまでに見えなかったブダペストの人々の良い面がいろいろ見えてきました。たとえば乳母車を押してトラムやバスに乗る時は「例外なく」、皆乗り降りを助けてくれますし、一度などはそれこそ立っているのもやっとなのお婆さんがどうしても私と子供に座席を譲るといつてきかないこともありました。外国人にとって安い物価でも現地の人達にとっては、今のインフレはどんなにこたえるでしょうと思うのですが、そんな中でもやりくりしてそれなりに生活の楽しみはちゃんと確保している人々の生活スタ

イルを知ったり、将来の生活上のために勉強している学生の友人とも知り合えたりで、今はブダペストの生活がとても充実しているのを嬉しく思います。

### 「ハンガリー電話考」

西川 啓子

ハンガリーに始めて一旅行者としてやってきた4年前、公衆電話をガンガンたたいている人を見掛け、あんなこととして電話がこわれるのにとよく思っただけです。2年たちこちらで暮らすことになって立場一転、たたかざるを得ない気持ちがよくわかるようになりました。ハンガリーの電話事情の悪さはいまさら説明する必要もないでしょうが、自宅に電話がないとなると事態は深刻になります。最初に借りたフラットが電話なしだったことから、通話可能な公衆電話を求めて町の中をさまよったことも1度や2度ではありません。使える電話の前にはいつしか同じ顔ぶれが並ぶようになり、同じ電話を

めざして歩いてくると見て取るやいなや、双方の足取りが早くなり、無言の競争になることも。この「使える電話」というのがくせもので、昨日までは使えたのに今日はもう使えなくなっている、等ということがざらです。一番たちが悪いのは受話器をとるとちゃんと「ツー」と音がするのに、お金をいれるとお金だけ飲み込み、通話不可というもの。20フォリントを3枚も食べられた日にはおもいっきり電話をたたきたくもなるというものです。でも中にはかけどくの電話なんていうのもあって、かけてもかけてもお金が戻ってきたり、たまに入れたのより多く戻ってくるなどということも。ただこういう電話は概して電話会社がすぐに修理してしまうようで、もう一度恩恵に預かろうと思ってもなかなかそうはいきません。

日本のように電話がいつでも通話可能という国からくると、ずいぶん惜けないような話ですが、こういうのに慣れてしまうと反対に電話なんて通じた



り通じなかったりするほうがあたりまえ、という気持ちになってしまふから不思議です。電話にも人間味があると考へて面白がるほうがいいのかも知れません。

### 『ブダベストの街並に想う』

柘原 祈子

十か月前、フェリヘジ国際空港に到着し、そこから我家に向かうまでの夜景の素晴らしいには大変感動したものでした。同時に今後このような景色を眺めながら生活できるのかと、この地への赴任をうれしくも思いました。

街を散策してみても、建物や壁彫刻の美しいこと、日本にはないものが溢れているようでした。しかしこの美しさは今後保たれるのであろうかと疑問を持ったのも正直なところでした。街の建物は灰色をしていますし、壁が崩れてしまっているところもあります。歩

道を歩くにも犬の糞を気にしなければならぬということもあります。私にはとて

ももったいないと思うのですが、ぼつぼつと修復工事の現場を見かけますし車の排ガスも規制されているとのことなので、ブダベストも更に美しくなるであろうと期待しています。

ここは自然も沢山残っています。冬が厳しいだけあって、春、夏の到来には心がはずみます。草木の芽がふくらみだし花が咲き実をつける。夏が短いだけに満喫しようと人々にも活気がみなぎっているように思えます。ブダベストは人間と人間が造り出したもの。それに自然とが大変うまく調和されているところだと思えます。

### 『ハンガリーの感想』

川本 三枝子

今のハンガリーは、昔と比べ随分物が豊かになったとききます。しかし、日本から来た当初は戸惑い、不便さを感じずにはいられませんでした。

しかし、生活に少し慣れあらためて感じるものがいくつもあります。その

一つに、日本では地方でしか触れることのできない人と人との「やりとり」を感じることはありません。

街でも田舎町へ出かけても、感じるのが人の優しさです。どこに行くにも子供連れなのですが、席を譲って下さったり子供の手を引いて下さったりなど日常の事です。又、子供好きの人が多く娘が少しハンガリー語が話せるとわかると喜んで話しかけてくる人もいます。

近所との付き合いも盛んで、色々なハンガリー料理を持って来て下さり毎週のように皿や鍋が行き来しています。このように、ハンガリーでは、人間同士の温かい「やりとり」が、常に交わされているように思えます。このような「やりとり」こそ今の日本の生活の中で希薄となりつつある部分だと思えます。

たった一年半ですが、こちらで暮らして私が見て感じたハンガリーの一面です。

『1989年7月14日』

梅村 欣世子

1989年7月14日、フランス革命200周年の日は、同時に私がミスからミスになった日でもあります。特にこの日を希望したわけではなく、区役所の結婚登録所に申し込みにいった際、たまたま空いていたのがこの日だったわけです。申し込みの時点で身分を証明する書類を提出し、生年月日、出生地などを再確認され、特に問題がなければ後日改めて区役所で結婚式を挙げます。(人によってはその後教会でもう一度結婚式を挙げます)その時日本では絶対聞かれないう質問に出会いました。

「結婚後の名前はどうしますか？」

ハンガリーでは、結婚後女性には

①夫の姓名を名乗る、②夫の姓を名乗る、③両方の姓を名乗る、④姓を変えないの4つの選択肢があります。私の場合だと、

① Köves Ferenczi

(クエヴェシユ・フェレンツ夫人)

② Köves Kiyoko

(クエヴェシユ・欣世子)

③ Kövesni Umemura Kiyoko

(クエヴェシユ・梅村 欣世子)

④ Umemura Kiyoko

(梅村 欣世子)

の4つの可能性があるわけです。女性の社会進出率の高いハンガリーでは、結婚後女性の姓が変わると色々不都合が生じるため、結婚後の姓の選択の幅が広いでしょう。わたしは④を採りちようど日本で夫婦別姓を希望する女性の声が高まっていたこともあって、日本の友人からは「よくやった。えらい。」と感心されました。しかし、そんな御立派な理由があったわけではなく、ただ単に夫の姓には日本人にとって非常に発音しにくい〇の音が入っていたからなのです。自分の姓を正確に発音できないなんて悲しいことですか

ら。だから、もし彼の姓が Köves でなければ今頃私は梅村ではなかったかもしれません。そんな私の気持ちとは関係なく、我が家のドアに 'KÖVES & UMEMURA' の表札が掛かってからもうすぐ4年になります。

『所変われば戸惑う』

中西 泰子

静かできれいな国、ドイツから引越してきてもうすぐ1年になります。日本との生活習慣の違いには、慣れていたはずだったのですが、「所変われば……」でしょうか？ 戸惑う事も多いです。まずは、食生活。海に面していないからなのか、輸入の問題なのか、やっと思付けた魚屋にあるのは川魚だけ。野菜も、果物も種類は少ない。店員さんは、国営だったからなのか愛想は無いし、客がどんなに多く並んでも急いでくれることもない。修理を頼むと約束の時間など無視、どんなに遅れ

でも来てくれるのは良いほうで連絡も無しで来てくれないほうが多い。我家の電話は、一年近くになるのに「明日は行く。」「今は担当者がいない。」で、調子の悪いままである。ハンガリー人であるアバートの管理人曰く、「ここはハンガリーだから。」なのである。

ハンガリーに来て一番ショックだったのは、車の排気ガス。騒音もさる事ながら、くさくて埃っぽい。他の国から戻ると一週間はトラバントアレルギ

ーに悩まされてしまいます。最近、市バスが排ガス基準をクリアしたバスに変わってきて、かなり空気がきれいで静かになった気がします。車もトラックもそうなってくれば嬉しいのです

が……。残念ながら我家の娘は、ハンガリーの学校で無くアメリカンスクールと日本語補習校に通っている為付き合える人は限られています。でも身知らずの外国人である娘に、ハンガリー人は親

切です。娘が席を譲らなければならぬ年配の方に譲っていただいた、順番を譲っていただいたりと……。私は日本で「席を代われ。」と無言の合図に「今日はつかれているのに。」と思いがら譲る事がありました。でも娘にはせっかくこの国で自分がしてもらったように自分より弱い立場の人がいれば気持ち良く手を差し延べられるようになってほしいと願っている。

### 「居心地がいい国」

成沢 京子

ハンガリーはどの様な国でしょうかと尋ねられましたら、

道路は、でこぼこで舗装状態が良くない。

お店に置かれている品が少ない。

野菜が少ない。魚がほとんどない。

断水・停電の「お知らせ」が、来ない。等々。

と、まず「ない」事を挙げてから、喧嘩をしている様に聞こえる難しい独特

な言葉について話し、そして、とても居心地がいい国ですと、答えるでしょう。

この人は、のんびりとしていて、話し好き、梁朴で、親切（…すぎるようなこともありますが…）そして、子供好きです。

例えば、バスの中などで子供を抱いて降りようとしているとき、手を貸してくれましたし、お年寄りの方でさえ席を譲ってくれた事もありました。子供が、タクシーの中で寝てしまった、荷物やバギーをどうやって持って降りようかと思案しておりますと、運転手さんが、玄関にまで運んでくれたこともありました。散歩に出ますと、御近所の方が、庭から花束を作って持ってきてくれます。笑顔で話しかけてくれるのです。

物質の面では、この2、3年で、急速に西側に近づいているのを感じますが、十分に豊かとは言えないと思えます。

しかし、この異国の地には、人の気持をゆったりさせざる何かがあるのです。

言葉は理解できなくても、人間のやさしさ、思いやりに触れる場面が、至る所にあるからです。

そしてその事が、外国人の私に、習慣も文化も違うのに、居心地がいい国と感じさせるのでしよう。

『昔の苦勞と今の幸せ』

天野 真理子

五年前の四月、私のハンガリー生活は始まりました。当時と比べれば信じ難い程便利になった現在、過去の話を持ち出すのもおかしなものです。今を幸福に感じる時、昔の苦勞あればこそと思うので少々懐述してみます。

そのころ、私は二・三才の子供を抱え、社会主義国ハンガリーで始まる生活に、特に物質面、医療面で不安を感じていました。渡航準備には五年分の子供の衣類、薬、ティッシュペーパーに始まる雑貨品まで百数十個のダンボ

ールを用意したものです。実際ABCに行ってみても行列はなく、物も豊富に見えましたがよく見ると同じ物ばかりが並び、牛乳ひとつ買うにも求める物を見つげるのに数週間探し続ける有様でした。目的の物を見つけたら十個単位で買い置きする習慣がっていたのはこんな経験からでしょう。又、工事中でもないのに停電が多く、それも数十時間も続くので、冷凍品を友人宅に預け回ったという話も聞きました。こうして始めての海外生活が不安と驚きの間に始まったのですが、それでも既に四、五年滞在していた方からは「良い時期に来られて幸せね。前はもっと大変だった。」と言われたものです。

しかし生活に慣れてくると次第にハンガリーの良い所も目に付く様になりました。例えば、野菜や肉、牛乳がそのものの味がして美味しいとか、中古で購入した車が交差点の真中でエンジン止した時、皆気長に待ってくれ、中には「大丈夫か。」と様子を見に来て、後ろを押ししてくれる人までいたり、そ

んな素朴な物、人々に暖かみを感じ始めました。

物質的に恵まれていないにもかかわらず、精神的にゆとりを持ち穏やかな表情をしている彼らは、私に新たな価値観を教えてくれました。

一年半前一時帰国しましたが、セカセカと時間に追われ動き回る人達、ツンとして整然と並べられた野菜等を見た時、まるで外国を見る思いがしました。豊かであるがゆえにおこる不満、貧困から生まれる感謝の気持ちと寛大な心、二つの国に大きな違いを感じました。

これからますます市場経済が進むであろうハンガリーに、贅沢な品々に溺れる事なく、以前のような素朴さ、人間らしさを持ち続けてほしいと望みます。

『自分の発見』

横田みきえ

これまでの七年半のハンガリーでの生活でことあるごとに、日本とハンガリーを比べてきたが、その度に、ハン

ガリーよりも、日本や自分自身を見出だしていたように思う。

出産後の子育てでは、こちらの乳幼児政策に感謝している。二才半から保育所に預けて働きたし、幼稚園にも四年間お世話になったが、この間、星食代とおやつ代を負担したのみである。

この国の三年間の有給育児休暇は、ある程度経済的に余裕のある家庭や、特定の職種に関わる人に限られて利用されている感じだが、ハンガリー人は、全般的にそれぞれのライフスタイルに合わせて利用している。IMFとの融資協定問題で、財政赤字の削減が条件となり、福祉に対する影響もあると思うが、第二回目の育児休暇に入ったばかりのハンガリーの若い友人は「クバ（前）蔵相の奥さんも休暇中だから、廃止にならないよ。」と言って、出産前に笑っていた。

ハンガリーでの生活は、ハンガリー人にとっても、外国人にとっても、当然、個人的事情によって異なるが「日本人生活習慣」をまだひきずっている

私などには、きびしいことも多い。最近気がついたのだが、日本にいた時に作った俳句と、こちらで作った俳句を比べて、また、また、自分を発見してしまった。

日本で、

形よきあけび鏡の前に置く

スプーンの長き柄薄し莖草茎

十六夜や大紙袋抱き帰る

ハンガリーで、

自らの怒り信じぬ如月に

春の貧異國の首都に住んでをり

サングラス優し嫌いは嫌いな

十六夜の涙ふくれて落ちにけり

「10年ぶりのハンガリー」

香山 純子

10年ぶりにハンガリーに来て、まず今回は、夫婦二人ではなく、子連れであるということが一番前とは、行動範囲、見方も目と違っているのです。着いた空港が別の場所であったこと、そして、昔も広告はあるにはあったのですが、街の中の広告の数や質、市街地

の古い建物がところどころ洗い流され綺麗になっていたこと、ベントツヤ、西側の車のタクシーが数多く走っていたこと、道路脇の芝生や、道路にまるで帯の様に車が駐車していたこと、中華レストランがあちこちに、また韓国レストラン、ピザ、ハンバーガー店などなど、驚きながら、家へと向かいました。大荷物を抱かえてはであったのですが運転手の人に頼んで懐かしい所を少し回りながら、地名も変更されているなど、見ながら、昔と変わらないライオン橋を渡り到着しました。

当時は、日本レストランも出来たばかりで、お醤油、ラーメン、ケチャップ、カレー料、マヨネーズ、などなくお醤油さえあれば何とか、という思いでした。作る時に、どうしても、という思いを込めるので、肉マンやちらし寿司、当時は新鮮な小ぶりの冷凍さばもあり、さば寿司、乾物、バラトン湖の太ったうなぎで、かば焼きを作った人も。何より丁寧にするため、日本のように手軽に出前、お店がないため、

「当地に来て一年半」

野原 律子

おいしく感じられたものです。今や、スーパーに、もやしや豆腐も売られ、ハンガリーのスーパーだけでも何とか工夫をすれば、事が足りるようになりました。こちらに来てもうすぐ一年になるのですが、未だに子供服など、どこに行けば安くて、良い物が売られているのか判らず、時折見つけたとしても、すぐに買っておかなければ、なかなか手に入らないことなど、一つの買い物に時間のかかる事しきりです。でもこれらのことも輸入の自由化など、

食品と同様に日に日に外国人にとっては薬になっていくことでしょうが、ハンガリー人にとっては薬な面だけではなく、まだまだ変動期の大変な時が続くでしょう。けれども、ハンガリー人のこと、何とか最もより良い道を選び、どこの国でもない、新しいハンガリー国”を目指し、築き上げられることを心から期待しています。



旅行から帰ってきて家路に向かう途中、ドナウの岸辺の眺めが目に入ってくると、旅行先もとても良かったけれど、ブダペストも本当に素晴らしいと感じ入ります。

しかし、「森にいて森を見ず。」の気分を抱いているのも確かです。

十五年程前、私の母より一世代は上のハンガリーの女性と、知り合いました。例の動乱後二十年一度も祖国には帰っていないと言っていました。出国の時、持ち出せたのはこれだけと言ってみせてくれたものが、その人の祖母からのものだと、十数種類の手刺繍のテーブルクロスとナプキンのセットでした。携えたものがこれだけと言うこともですが、「今の日本には母から子へ受け継がれるものがあるかしら。」と言う思いが数々のテーブルクロスの上に広がりました。

当地に来て一年半。もちろんハンガリー人と接触はあります。

まだこちらに来て間もない頃、「ハンガリー語もわからないのが買物にまで、まったく。」という態度で対応され、必ず一個に一個、傷んだ果物が入っていて、まあこちらもその通りなのだからしかたがないと思っていました。が、この頃は、傷んだものはよけてくれるようになり、私が得意客になったからかしら、あるいはこれも意識の改革というものかしらと感じたりはしています。が、ハンガリー人の日常生活が見えてこないのです。

たぶんに個人的な繋りが希薄だからでしょう。

「ここはヨーロッパだと思っていない。」というベルギー人女性の言葉から「ヨーロッパって何。」とか考えてみたり、やはり、こちらに暮らしているからこそその視点の広がりを感じるのですが、ハンガリー人との楽しいお付き合いは、これからの生活如何なのでしょう。

ブダケシの森の散策は折りに触れ、楽しんでいきます。

# 「国連えばファッションも」

浅野 晴美

寒い二月にこちらへ来て、春の素晴らしさに感動し、駆け足でやってきてしまった夏？に戸惑っている今日この頃です。

三月上旬始めてメトロに乗った日。

あのモスクワ広場の長いエスカレーターの人々は、皆一様に暗くて黒っぽくてこちらまで憂うつな気持ちになっただものでした。ところが、春の訪れと共にそれぞれが様々な服装をし始め、日本の画一的なファッションに慣れた目には、それはとても新鮮に映りました。スカートはもとより、長袖有り、ノースリーブ有り、皮のジャケット有りで、「もうそろそろオーバーバート有りで、「もうそろそろオーバーバート着てもおかしくないかしら？」などと無意識の内に外出前のテレビ画面を気にしたり、「今時、このラインは古いわ。」などと、ワンピースの型を着にしたりしていた自分が、ひどくつまらない事に捕らわれていたように思えて

来るのでした。何の事はない、自分が

暑ければ涼しい服を、寒ければ暖かい服を、そして何より自分が着たいものを着れば良いのではないか。何もむずかしい事はないではないか。その通り基本的には本当にそうだと思えます。

流行に捕らわれて、皆同じような服装をしている日本の人達の方が、考えてみれば無気味な気がします。でも……

ここからが問題なのですが、皆が感じているあの女性の下着の件ですが、これは国民性なのでしょうか？あまりにもおおらかではありませんか？男性は大歓迎のようですが、時として目のやり場に困っていらっしやいませんか？

私が戸惑っているとはこの件で、銜なかはもとより病院でも、主人のオフィスでも、老いも若きも皆そうなのですね。おしゃれの基本は「人に不快感を与えないこと。」と聞いたことがあります。ではこの国の女性は？？賛否は男女で相当違うとは思いますが、時として「どうかして！」と云いたく

なる人が居るのも事実です。

以前、中近東に駐在しておりましたが、あちらは又極端で、テニスの服装（短いスカート）のまま、スーパーマーケットで買い物をしていた英国人女性が強制送還、などという所でしたから、私たちも外出時は極力肌を出さないよう心掛けて生活していました。そのときの大使夫人のお言葉。「外国人である私達は、この国で生活させていだいていけるのですから、この国のルールに合わせて生活するのがマナーだと思ふのよ。」なるほどそうだと、その時は深くうなずいた私ではあります。が、さてそれでは、このハンガリーのルールとは？

合わせるとなるとむずかしい？

## 「公園で」

下川 好英

就園前の子供がいるせい、日本にいる時と同じ時間割で毎日が過ぎてゆきます。家事、そして公園通い。

今日も公園へ行くとお馴染みの顔ぶれが揃いお母さん達（お母さんとは限りませんが）は一頻りおしゃべりを楽しんでいきます。ところがここがハンガリーらしく、皆さんおしゃべりしつつも絶えず、自分の子供に目を光らせているのです。何か不審な動きがあるや否や飛んで駆け付け、正しく遊ばせる指導をします。

すべり台、ジャングルジムは落ちないように付きそい、砂場では悪ガキに砂を掛けられない様に気を配り、喧嘩が始まるや否や有無を言わず引き離します。もちろん、泣いている子供でもいようなものなら注目的です。息子が泣いた時の、周囲の異様な雰囲気には親の方が冷や汗が出てしまいます。「あんなに泣かせるなんてー」と言われていたようなのです。（本当に泣く子は珍しいので、今では私もついつい注目してしまいますけど。）

日本から直接ハンガリーに来た私には、最初はちょっとショックでした。公園では、子供は子供で勝手に遊んだ

り喧嘩するものだと思っていましたから。

ハンガリーの子供達が、人なつこくして小さな子供に心配でやさしいのは、こうして大人に大切にされているせいかなとおもいます。でも近頃、日本のテレビ番組の「変身もの」がお気に入りのわが息子が、この子達に「キークー」をしませんように、と内心ビクビクしている私です。

### 「笑顔と仏頂面」

清川 幸美

ハンガリーの印象は笑顔ですか、それとも無愛想な仏頂面ですか？あなたは自分の表情は笑顔と無表情、どちらが多いと思いますか？

二年前の三月、始めてブダペストの空港に到着した時、最初に接したハンガリー人はビザの窓口の女性でした。日本円でも大丈夫と聞いていた私は、

ドルも、マルクも持っていますんでした。彼女は不満そうに私のパスポートと申請書類と日本円を持ってぶいと別

の部屋へ行ったきりなかなか帰ってきません。薄暗い空港の部屋はすぐに誰もいなくなり私と子供二人だけが残されました。やっと戻って来た彼女からパスポートとフォリントのお釣りを買ってイミグレイションを出ると人気がないホールに私スーツケースだけがぼつんと残っていました。大阪から、幼児二人を連れて、三回も乗り換えて、やっと主人のいるブダペストに到着したのに、この旅で一番細かい思いをしたのは、なんとブダペストに到着してからだったのです。

雪こそありませんでしたが、三月の町はまだ暗く、薄汚れています。日々の買い物に出ても、マーケットやクリーニング屋の愛想がなく無表情な店員とのやり取りが言葉がわからないためだけではなく、重苦しく、身構えてしまったものです。しかし、子供がいては家に閉じこもっているわけには行きません。子供を連れて外を歩くと、東洋人の子供が珍しくて、話しかけて来たり、頭を撫でたりされます。ハンガ



リー人の子供も、物珍しそうに、しかしにこにここと挨拶します。こちらも自然に笑顔になります。そうして気が付いたのは、私は日本にいるときより笑顔が多くなったのではないかと言う事です。鉄仮面のような人に対する時は私も表情がきつくなっていると思えます。反面、知らない人でも自然に笑顔で挨拶している事に気付き、こういうことは日本ではほとんどないと思うのです。

古い体制は人々の表情までこわばざれていたのでしょうか。段々それも和らいできているように思います。ハンガリー語の疑問文では、最後から二番目の音を上げて、最後の音を下げますがお店で聞き返されたりしたとき、詰問されているようで、仏頂面の印象が余計悪くなったのですが、このイントネーションが分かると、気にならなくなりました。そして、素朴な好奇心、子供に対する衝動的とも思える親愛の表情などは、西側の先進国の人々の、

個人主義的無関心とは違って、思わずこちらも引き込まれてしまいます。私も又負けずに道行く人や列に並ぶ人の表情をしっかりと観察してしまいます。

無愛想な店員はまだ多いけれど、日本のような不自然な愛想笑いや、作り声はない。日本では、エレベーターに乗り合わせた人や、散歩で出会った人と挨拶する人は少ない。中庸を良しとし、喜怒哀楽を押さえる日本人から見ると、その気候風土と同じく、ハンガリー人の感情表現は極端に見えます。しかし、仕事で苦労している方々は別の印象をお持ちでしょうが、私と同じく、ここに暮らして、笑顔が多くなつたと感じている日本人、特に、女性は多いのではないのでしょうか。

### 「コミュニケーションの大切さ」

土井 牧子

ハンガリーという国が、どんな風に見えるのか、それは、その人の心の持ちようのように思います。

ハンガリーの無愛想な店員さん―これは始めて入るお店に多いことです。そんなお店でハンガリー人の買い物客がどんな風に店員に接しているのか耳をすまして聞いてみました。

「何てきれいな鳥肉なの！どれも、これも、新鮮だわ。」すると無愛想な店員さんも、口を開いて話し始めました。そして友達となると次からはきつとニコニコして対応してくれます。

待たされること―この自衛策は、ありません。時間の無い時は買物物は、しないことです。でも先日、長らく待たされている人が、店員さんに向かって、「あなたは何ていい手つきをしているの！」というようなことを言っているの―というように、買物店員さんを喜ばせていました。買物上手はほめ上手なようです。

このように人とのコミュニケーションはこの国では特に大切です。それは「いかに挨拶が大切か」にも象徴されています。(ウチの息子はなっていないせんが)子供は大人に敬愛の意味をこ

めて、「チヨコローム」その大人は、より年配の方に「チヨコローム」と必ず挨拶します。私も子供連れで歩いてみると、見知らぬ人から「シアー！」と挨拶され、その後必ず「何て可愛い子供さん！」とほめられます。

私がハンガリーで一番好きなところは、日本が失いつつある、こういうコミュニケーションションです。そして、まだまだ、こういうコミュニケーションションが必要な国です。

ある日突然、水道が止まる、ガスが止まる、何の掲示もされていない——こんなとき近所の方がわざわざ知らせに來てくれます。そして時々バスまで止まる。(これも何の掲示もありません。)——知らずに永らくバス停で待っている、通りがかりの人が、数十メートル先で工事をしているので、バスはここを通らないことを知らせてくれます。

日本だと、こういうことを話す必要がありません。必ず、どこかに紙が、

はりだされ、ガスか水道が止まる折には各家臨にお知らせが入るか、もしくは回覧板でそれを知るかで、直接話す必要はありません。

ここは日本とは違い不便なことも、たくさんありますが、その「不便さ」を楽しむ気持ちで、ハンガリーに心を開いて行けば、きっと、素晴らしい国に見えてくるに相異なる。と自分自身に言い聞かせる今日この頃です。

### 「子供を通したハンガリー」

西田 美恵子

ハンガリーでの生活をはじめて一年余り。生活にも慣れて、少し周囲を見回す余裕も出てきた。昨年九月より娘が近所の幼稚園に通いだしたこともあり、ハンガリー人と直に接し片言ながら言葉を交わす機会も増えた。その中で最近深く感じることは、ハンガリー人の「親切」である。特に子供や子供連れの母親に対してとても温かく接してくれる。通りすがりの人から声をか

けられたり、乗り物の中で席を譲られたり、困った時にさっと手をさしのべてくれるのに、最初は戸惑ったが今は素直に御礼の言葉が出てくるようになった。外国人だから特別なのかと思っ  
て見ているとそうでもなく、弱い立場の人への配慮が徹底されているようにさえ見える。娘の幼稚園での様子を見ていても、年長の子は小さい子の面倒を  
実に良く見るし、見るからに腕白そうな男の子も女の子や小さい子に対してソフトに接して、小さい子や外国人をいじめるようなことは決してない。  
先生の羨の厳しさもさることながら、子供の頃から親やまわりの大人を見て自然に身についた弱い者を思いやる気持ち  
が「親切」となって行動に現れているの  
だろう。

次の世代を担う子供達に、親としてどんなことを望みますかと問われれば私はやっぱり「思いやりのある人に育  
って欲しい。」と答えると思う。日本人が忘れて  
いる心のゆとりを、ハンガ

リー人は毎日の生活の中に当たり前に持っている。娘がハンガリーでの生活を通して思いやりの心を育み、日本で得られない数多くの体験をしてのびのびと成長して欲しいと願っている。

『ブダペスト音楽専門教育に思う』

・・・その第一印象記』

佐藤 美都子

半年ばかり前からブダペストに住んでいるが、それはただ夫の転勤に伴ってであり、そこにはバイオリン奏者としての自分自身の具体的な目的は、何らなかった。しかし先日来ふとしまきっかけからハンガリー人の音楽家三人に会い、彼らの教えを受けたりレッスンを聴講したりする機会に恵まれた。そして計らずも、自分自身が日本で受けた国立音大での音楽専門教育と、その後フランス留学中に受けたパリ・コンセルヴァトワールでのレッスンと、そのどちらとも一味違うハンガリーの音楽専門教育を、垣間見ることとなっ

たのである。

一昔も二昔も前のことで恐縮だが、私が日本の大学で勉強していた頃、すなわち七十年代は、日本ではまだ音楽の教授と演奏家というものが、はっきりと分かれていた。つまりほんの少数ない例外を除いては、一般的に大学の音楽科の教授は演奏せず、ソリストは大学教授ではなかったのである。残念なことに、私は自分が音楽大学で教えを受けた教師のバイオリン演奏を、ついに聴く機会がなかった。なぜなら、一度も大学にバイオリンを持っていらしたことはなく、よって一度もレッスン中にお弾きになったこともなかったからである。その後八十年代に入り、それまで海外で活躍していた多くの若手日本人演奏家が帰国し、積極的に後進の指導に当たるようになる。そのため日本の音楽大学も大きく変革される事となるのだが、私は個性尊重とも放任主義とも無関心とも不干渉とも取れる、もっぱら言葉だけに頼った、はな

はだ抽象的なレッスンを受けて、大学を終了した。そのためその後、パリ・コンセルヴァトワールのドゥカン教授のもとで、あれほどに苦しむ事になろうとは思ってもいかなかったのである。

ドゥカンのレッスンは今まで自分が受けてきたものとは完全に質を異にした、いかなる共通点も類似点も近似点もないものであった。弓を持って弦に降ろそうとするその瞬間から、弓が弦から離れるその瞬間まで、ありとあらゆる音と動作とに対して厳密な注意が与えられ、それは「このような弾き方もある」という示唆だとか、「気にいればこうすれば良い」という選択の問題ではなく、必ずこうすべきであり、そうしない限り一歩も先へは進めないという厳格な指示であった。私は一つの音を出すごとに止められ、どのよう

に弾いても、*Non.*と言われ続けた苦悶のうちに、「思想と感情を表現する行為である演奏と言うものが、構造的にはテクニク集積以外の何物でもな

い。」というドゥカンの理念に行き着く。それはちょうど文章というものが、長短、難易、美醜、いかなるタイプのものであれ、結局は言葉の選択とその配列に集約される、とするのと同じ考え方であった、滑らかに、激しく、豊かに、いきいきと、といったアプストラクトな言葉は、ドゥカンにとって何の意味も持たなかった。代わりに弓のどの部分をどれほどの量使用し、どれほどの圧力をかけ、親指はどの位置に置き、いかに弓をコントロールするか、ピブラートはどの角度にどれほどの速度でかけ、作曲者が意図したフレージング及び正確な音程を得るのに、どの指使いが最も適しているか、といったコンクレートな表現だけが意味をなした。…無我夢中の一年が過ぎたころ、私は同じドゥカン門下の友人の演奏を聴きながら、ふと奇妙な、しかし実にもっともな事実気付く。つまりドゥカンの生徒は皆、瓜二つに弾くという事であった。

さて、今までにブダベストで、私が出会う機会に恵まれた音楽家は、ピアノのキッシュユ、チェリストのミハイ、バイオリニストのデービッチの三人である。キッシュユ氏は武蔵野音大に客員教授として招かれた事もあり、日本の事はかなり詳しい。自宅にお邪魔したら玄関でスリッパを出され、部屋にはすばらしい日本人形が飾ってあった。巨大なグランドピアノを大きな体躯で難なく操り、そこから強靱な音を弾き出すピアノリストである。ミハイ氏はもう八十近い長老、バルトークがリスト音楽院で教えていた頃、ちょうど音楽院の学生であったらしい。長年リスト音楽院の室内楽主任教授だったが、近年健康上の理由から、活動を制限しているのだという。もっとも私はリスト音楽院のレッスン室に伺った時は、夜の九時過ぎまでレッスンをしただけだが。デービッチ氏は、かつて世界でも有数の優れた弦楽四重奏団であった「バルトーク・カルテット」の第

二バイオリンとして、コンサートにレコーディングに国際的な活躍をした人である。現在、ミハイの後を受けてリスト音楽院室内楽主任教授をしており、リスト音楽院分館のレッスンに伺った時は、分刻みのスケジュールを精神的にこなす、多忙な音楽家の一面を見た。

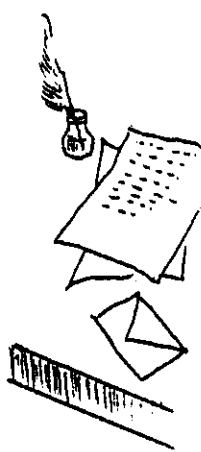
これらの専門楽器も立場も異なる三人の音楽家に会って、まず何よりも驚いたのは、彼らが共通して持つ音楽に対する柔軟性とその知識の幅の広さであった。

ピアノ科の教授がバイオリン科の生徒にバイオリンの曲をレッスンし、バイオリン科の教授がピアノの連弾曲を見るなどという事は、日本や、フランスでは考えられない事であるが、ここでは極めて自然に行われているのである。異なる専門楽器でも、すべてを音楽として捉えてしまう事のしなやかさと、その知識の豊かさに感嘆してしまう。それは高度な水準の演奏が高度な

テクニクなくしては決して成立しないという鉄則を十分に踏まえた上で、

それでも尚それだけではないはずだという、一つの反証行為のようにも私には見え、考えは巡る。殆ど機械的だともまで言える、高度な完成度と完璧性を要求されるテクニクの習得と、人間的な豊かな感性の育成、この二つを両立させる音楽専門教育は、ひょっとしたらこのような柔軟な音楽教育の中にその糸口を見いだすことができるかもしれないとも思ったりする。

第一印象というものは、時としてその本質を貫いているが、時として、後にまったく正反対の考えに至る事もある。ブダペストに来て半年の私の第一印象も、多分に個人的経験に基いたものであり、ひょっとしたら全く的外れであるかも知れないが、それはそれで印象というものの持つ宿命として許して頂ければ、幸いである。



## 「日本を振り返る」

大西 初恵

ハンガリーと私、そしてコダーイの教育理念との出会いは、もう十年以上も前、短大時代に音楽教育に興味を持ったことから始まりました。以来、ここで勉強できることを願い、三年前にやっと実現しました。

学生時代、アイデンティティーを求めていた私にとって、コダーイの「音楽教育は音楽の母国語（＝自国のわらべうた、民謡）から始めなければならぬ。」という言葉は、とても新鮮なものでした。

日本では、ピアノを習うといえば、ほとんどバイエルから始まるように、私も当時はそれしかなかったこともあろうでしょう、大多数の人と同じ様にバイエルからチェルニーへ、ソナチネ、ソナタへと学んできました。しかし、学校や、ピアノのおけいこと、家での父の趣味の名曲全集、ラジオ、テレビから流れてくる（民族音楽についても良い番組がありました。）幅広い豊かな音楽環境との大きな違いは、子供な

がらも感じるものがありました。

ハンガリーのある音楽教師の言葉、「赤ちゃんや子供に、アルコールやお菓子ばかり食べさせる親はいないでしょう。音楽も同じ様に、母乳や栄養価の高いバランスのとれたものを与えるべきです。特に学校教育の場では。」

教科書を比較してみても、日本には優れた伝統教育があるにもかかわらずそれらに対する比重はわずか（これは邦楽界が、閉ざされた世界であったことも原因）、読譜力を養えるような配慮もなく、紙の質の良さと、色彩のきれいさ、という他には、何の取柄もありません。その点ハンガリーの教科書は、教材の豊富さと系統性は、大いに学ぶところがあります。ピアノの教材もそうです。わらべうた、民謡から始まり、二年目くらいから異なった様式の作品を学びます。もちろん、チェルニーはテクニクの為にあります、バロック、古典派、そして現代の作品バルトークやクルターグなど、また少

しすめばロマン派へ。日本で使われている曲集を見た先生が、「これは人に聞かせられるたぐいの曲ではない。家庭でか、せいぜい、肉輪で楽しむ程度のものだ。」と、言っています。要するに明治以降、当時ヨーロッパで行っていたサロン音楽が、日本に輸入され、日本に残っているだけのことです。

良い先生も、そうでない先生もいるというのは、どちらの国も現実的に同じです。ただ、良い教科書ができるという背景に、コダーイをはじめとしてたくさんのお音楽家や教育者たちの真に価値のある音楽や文化を求め、それを子供達に伝えていこうとする姿勢があり、現実の厳しさに向かっていくエネルギーの強さを感じます。社会、教育の中で、芸術分野のかかえている状況は、日本と変わりありません。

ドナウ河畔やブダペストの建築、町並みの美しさを見る時、そしてそれが生活の中で生きていることを思うとき、日本は、古くからあった伝統の良

さが、もう過去のものになってしまっていて、ただ、その思い出と、外国に宣伝される幻想の中で生きているのではないでしょうか。日本を経験した、二、三人の友人によれば、「残念ながら日本では、高度に発達したテクニカ以外、良いものも、美しいものも見ることができなかった。人々は忙しうかせかと昼夜動き、疲れ、人間らしさをとりもどす暇もない。お金は確かにあるだろう。しかし、大切なもの知らぬ間に失っているのではないか。」と。

先日の歌舞伎のような催し物は、ただ国際交流だけではなく、日本人のためにも必要とされ、また、経済・技術の発達に比例して、日本人の人としてのあり方が注目されているこの頃だと思えます。

私にとってハンガリーとの出会いは日本を学ぶきっかけになりました。



### 「私のハンガリー感」

玉木 裕美子

音や香り、手触りなどで遠い昔を思い出す事がある。私はこの国にいて原っぱの草いきれ、或いは木々の葉音、マロニエを燃やす時の燻された匂いで幼かった頃母の田舎を訪れた際、触れた風、或いは何かしらひどくなつかしい思いが蘇ってくる時がある。

小学生の私の子供は、二百万都市ブダペストに住みながらハンガリーを「田舎」と云う。「田舎」だからハンガリーが好きだと云う。雉子や針ねずみが車道を横切るからか、栗鼠やキツキが身近にいるせいか、果物屋の店先でしか見たことのなかったプラムや桜ん坊が自分の手でもぎ取る位置にあるからなのか、理由はわからない。日本ほどこせこせしていないことを感じてそう表現しているのかも知れない。

けれども、私が時折（東京近郊に住んでいた時より、かなりしばしば）感じる、郷愁というものでは決してない一種の懐かしさを含んだ、五才なら五

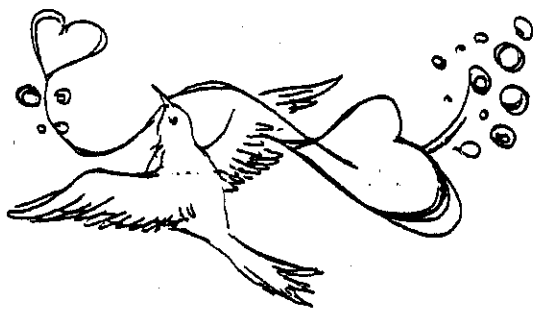
才の時の感覚というか、これと同じ空気を感じたことがある、前に同じ様な情景を見た、と意識する一瞬は、ハンガリーが「田舎」であるからだけでもたらされたものではないと思う。たしかに、買ひ物籠を下げてスーパーに行ったり、物も豊富にないという不便さは、程度の違いこそあれ三十年前の日本に近いかも知れないから、当時と似かよった雰囲気は多少影響しているかも知れない。しかし、ハンガリーには潜在意識としてすら自覚しない、とおに忘れてしまった幼児の頃の記憶を忍ばせる何かがあると思いたい。でないとな年をとって、ただ昔を懐かしむ回数が増えただけだと言われそうである。

それにしても、オゾン層破壊が著しい天から注ぐ太陽の眩しき、汚染されていると言われている空気が運ぶ、自然の香り、そんな物に、普感したと同じ一種の幸福感を感じている自分を我ながら変だと思う。が、こういう感じを受け得る間は少なくとも、厳しいこの国の冬に「冬眠したい！」と切実に

願う部分が無いので有難いのである。それが、私の感覚を揺り起こす事の出来る間は、税関手続きのため、サイン一つに延々七時間(のんびんだらりとした仕事振りを、昼夜抜きで拝見しつつ)待たされ様が、地下鉄の中で思い切りハイヒールで踏みつけられ一言の詫びが無くても、こういうことも人生にはあると思えるのではないか。

有難いことに大家にしる、ハンガリー語の教師にしる、周りは欲得なしに良くしてくれる人ばかりである。劇場で見も知らぬ「外人」である娘を、膝に乗せて舞台を見せてくれるおばさんや、冬場バス停で、スカーフを衿でなく頭に巻いた方が暖かいと結び直してくれたおばあさん、実際これは赤頭巾ちゃんならぬ黒頭巾でかなり恥ずかしかったのであるが、耳を覆ったせいだけでなく、寒風に吹きさらされて凍った身体がじわっと溶けていくような温かさを味わったのを覚えていこう。この人達は、空気が汚れていようが、周りとは関係なしに、懐かしい思いを運ん

でくれる風や香りである。この存在とその事によって私の中のハンガリーに対する感覚が維持できる間は、子供の云うところの愛すべき「田舎」の部分を持つハンガリーがどう変わっていくのか、この二年の変化を考えると、季節柄もあり、冬眠するよりも、もっと大きく目を開いてこの国を見つめる方が大切な、と言う前向きの気持ちになれるのである。



「ドナウの真珠」と呼ばれるブダペスト。この広い世界の中の、この東欧の都で一緒に生活する私たち。

今日は、ちょっとまじめに語り合ひましょう。

石崎 京子

鈴木 友子

瀬川 知恵子

藤島 あや子

山崎 順子

※到着した季節によって、第一印象はずいぶんと違って感じられますが、まずは、ブダペストでくらしはじめての感想をお聞きます。

●東欧でくらすのは、はじめてなのでハンガリー人と接してみても、いろいろと興味深く、おもしろく思いました。

感情を、そのままストレートに出す

国民性なのか、めずらしいものには面と向かってジィーと見つめる人が多い。

こちらに来た三月末には手編みの毛糸の帽子や、毛皮の帽子、コートシヨール、ブーツが目につきました。

地味な色合いが多く、生活必需品としての衣料を感じました。素朴で、

素直な国民ではないか、との印象を持ちました。

●冬に来たせいか、市内の建物の色彩が暗くて、ゆううつになりました。

●一年で一番よい季節に来ましたので緑豊かで美しい所、という印象を受けました。地方にしばらく住んでいたの、欲しいものがすぐ見つからず、困ったり、また、子供達も時間を待て余してしまいました。

●七月末に来ました。何て暑い所なんだろう。というのが、第一印象。想像していた以上に、品物も豊富で、特に果物の種類が多く、その上、安く、驚きました。

●お年寄りが多く、しかも、車を持っている人ばかりではないので、皆さん、手に買い物袋をさげていてシン

ドそうでした。でも、顔の表情は明るいな、と思いました。

※ここでのくらしぶりは、いかがですか？

●子供達の教育問題の心配さえなければ、くらしやすい所だと思えます。天候の面でも冬も、太陽光線は明るいし、暑い夏でも湿気が少ないし。

●路上に立っている売り子が、しつこくないのが良いわね。『Tessie』と呼びかけるだけで、上品な感じさえします。

●治安は、悪くないと思います。タクシーにも、真夜中でなければ、女性だけでも乗れるし…。ただし、メーターが、車によって早回りしたり、道を遠回りしたりされることは、ありますけど。

●でも医療面では、やはり不安があるわ。設備が整っていないし。ちょっと不衛生な所もみられます。



●なにしろ、ハンガリー語がむずかしい。会話ができないので、何かひとつ、事処理するにも、時間がかかりすぎる。

●ハンガリーに限らず、外国でくらす場合、家を探すのはとても大変ね。

日本人を含む外国人が住む地区では比較的、新しく、一見よさそうな家が多いのですが、学校、買物の便や治安の面などの条件を照らし合わせると、なかなかです。

●それは、本当にそう。

それに、家賃が高すぎるような気がするの。外国人には、値を吊り上げるのかしら。私も去年の夏、引っ越ししたのですが、くたびれたわ。

●私は、最近、車の運転をするようになったんだけど、運転マナーは、もうひとつという気がします。ワインカーを出さずに、突然曲がったり、割り込んできたり。

それから、教育費の割合が、生活費の中で、かなりを占めている気がします。

☒ハンガリー人と、その人柄については、どう思われますか？

●気持ちのいい挨拶をするわね。挨拶

さえしつかりすれば、次の会話がとてもスムーズになります。

ただ、約束に対して、誠意は見せるけれど、約束を途中で変更することには、罪悪感を持たないみたい。例えば、補習校の移転。きちんと、書類だけ契約を澄ませているのにもかわらず、まじかになって、「お約束していた部屋は、お貸しできなくなりました。」とか。

●ハンガリー人って、自分の欲求のまま行動するって感じよ。素直というべきか、素朴というべきか、自分勝手というべきか。

●それに、絶対に非を認めないし…。直ぐに言い訳をするでしょ。つまりは、理由さえあれば、自分の行動を

正統化できるという意識かしら。

●時々、お店では、人を見て、品物の値段を決めたりしているような気が

します。あれは、どうも、感じが悪いわ。だから私は、値札のあるお店で、なるべく安い物はしているんだけど。

●私が接したことのある範囲に限るけど、若者たちには、比較的、好感がもてると思います。特に、大学生達には。

●ハンガリー人は、とても、愛国心の強い国民だと思わうわ。そして、ベストには、特に、誇りを持っている。それが、これから、ますます発展していくハンガリーには、とてもプラスになると思います。

●物のありすぎる日本に比べるのも、おかしいけれど、この国の人々は、物がなくても、心は、豊かという感じもします。音楽を楽しんだり、自然を楽しんだり。

●私のフラットは、全員ハンガリー人なんだけど、とても親切よ。困った時は、すぐ、助けてくれるし、子供連も、庭で、一緒に遊んでもらったりしているわ。

因今、現在のブダベストを、どう思われますか？

●この一年でも、西ヨーロッパの商品が、驚くような勢いで、店頭に出回るようになったわね。だけど、いつでも、同じ商品が手に入るとは、限らないのが残念ね。

●しかしながら、サービス精神は、以前と変化なしだと思います。物質だけが、先行しているという感じがしない？

●食べながら、レジを打ったり、品物を渡したりするのは、どうかと思うけど。これは、習慣の違いかしら？

●それと包装技術がまだまだでしょ。

●過剰包装は必要ないけれどもね。

●商品をニースに合わせて取り扱うようにしてもらえないかしら。

トマトの上にじゃがいもを。ドサツと、無造作に入れたりしないではない。

●環境問題は、まだまだ、という気が

するんだけど。たとえば、分別ゴミとかね。

●それにしても、レストランの数が、増えたと思う。西ヨーロッパから、化粧品、洋品店、スポーツ店も、どんどん入ってきているし。

●私達にとっては、生活しやすくなってきたわね。

●でも、物価が急上昇しているのではないかしら。ハンガリーの人達の生活は、どうなのかしら。

●きつと、大変よ。

●観光客も、ずいぶん増えてきたと思います。西側の人々をはじめ、アメリカの人々、そして日本の人達も。もともと、今までは、宣伝不足だったということもあるでしょうけど。

●こんなに、豊富な温泉のことも、知らなかったし。

●街を走っている車も、きれいになってきたわね。バスも環境に良いという車種を取り入れたり。日本車が、多くなってきたのも、特徴的です。

●でも、排気ガスは、まだひどい。有鉛ガソリンの車も、少なくないし。

因最後に、私達がお世話になっているハンガリーとの、これからについて、全員の意見をまとめてみました。

◆一度交わした約束事を、一方的な都合で変えられてしまうことが、しばしばあります。これはハンガリー国内で、ハンガリー人同志だけしか、通用しないことだと思います。ハンガリー人の、精神構造の国際化を期待します。

◆音楽への理解と、伝統の深さには、感心させられます。

ブダベストでは、豊富なプログラムから時には、超一流のコンサート、劇、オペラを観賞することができるのは、素晴らしいことだと思います。チケットの値段も安いので、一般の人々にも、文化が浸透していると思う。

市内の建物も、歴史を越えて良く保存されているし、文化面でも、優れたものが

多い。ハンガリーの伝統は、しっかり守り、残していったってほしいと思います。

◆最後に一言。一番の援助国である日本が、信用ということを大切に考えるのに対して、ハンガリーは、一部で、誠実に欠けているような気がします。そこでは、常識という言葉の解釈の違いが、浮き上がってきてとても、むずかしい問題があるのだけれど…。お互いに、気持ち良く信頼しあって、おつきあいを深めていければいいわね。そのためには、私達も、ハンガリーのことを、もっと勉強するように努力していきましょう。

## 🍷 掲示板 🍷

★オープンします。

6月中旬、八百屋が仮オープン致します。お客様専用の駐車場をご用意しておりますので、皆様のお越しをお待ちしております。

### △営業時間△

月～金曜日 10時～20時まで  
土曜日 10時～15時まで  
日、祭日は休み

S A B A N I K F T

Japin Zsidótelek

1027 Budapest II. ker., Kapas u. 18.

☎ (06-1) 201-2483

★Budai Vigadóにおける  
国立民族舞踊団の公演は、以下の通りです。

7月	13日、14日、15日、20日、21日
8月	3日、4日、5日、10日、11日
9月	1日、1日、7日、8日、9日
10月	5日、6日、7日、12日、14日
11月	19日、20日、21日、26日、27日
12月	23日、28日、29日、30日
1月	28日

予約は、

TEL: 201-5928 / 3766

FAX: 201-5017



夏期号は「女性からみたハンガリー」という視点で、多くの原稿をいただきました。とくに、天野真理子さんには原稿の依頼から収集まで、たいへんな仕事をお引き受けいただきました。

天野さんの精力的な原稿集めのおかげで、本号ができました。連絡がつかなかったり、電話が変わっていたりして、何人かの人には連絡がつかなかったようです。また、何人からの人々からは、別の機会にもう少しとまったら原稿を寄せたいという希望もいただきました。原稿をお寄せいただいた方々にお礼もうしあげるとともに今後とも「会報」にたいする支援をお願いする次第です。

お寄せいただいた原稿を拝読しながら、いろいろ考えさせられました。日本を外から見ることによって、人間や社会に対する新しい発見があります。日本にいるときには疑問に思っていないことが、外国で生活して始めて新しい問題として浮かび上がってきました。

日本経済の発展の一つの要因でもある日本の学校教育も、外からみると、たいへん不自由で規則づくめ感じを受けます。その癖、文科系の大学教育は間抜けなほど弛緩しています。帰国子女として日本に帰った時に、そのことが子供によって体験されるわけです。日本の製品のすばらしさはいままで

リング、桜ん坊、いちごを一個ずつパックする必要はないですか。良いも悪いも1kg単位で売ったり買ったりするほうが、余程、自然で良いではないですか。

工業製品の質量と文化の発露度は比列しません。ですから、日本にないものがあるから、ハンガリー社会は日本社会より数十年遅れているとはいえません。工業技術が遅れているのは確かですが、それで文化の発露度が推し量られるわけではありません。ハンガリーに来て、日本で失ったものを再発見した人も多いと思います。自律神経の回復の効果ではないでしょうか。

(盛田 常夫)

もありませんが、しかし日本全体が「神経過敏性」に陥っていると思いませんか。あるいは、国家的な自律神経失調症と呼ぶべきことでしょうか。何も